

巻 頭 言

戦後70年 歴史と時代を見つめる

コミュニティ福祉学会運営委員長

コミュニティ福祉学部学部長

浅井 春夫

いまの時代を考える3つの視点

戦後70年の今年は「安全保障関連法案」をめぐる揺れた1年となりました。さまざまな意見と運動が展開され、国会での法案成立後も現在進行形で論議されています。また8月には「戦後70年 安倍談話」も出されました。

日本の進路について私たちが戦争と平和を意識し考える1年でありました。いま大事なことは、日本とアジア、世界のこれからについて“私の意見”を形成し続ける努力をすることではないかと考えています。その思索にかかわって3つの視点をあげておきます。

まずコミュニティ福祉学部の基本理念は“いのちの尊厳のために”であり、福祉の原点がここにあります。また立教の歴史においても戦時体制の反省に立って、2度と学生を戦地に赴かわせてはならないという姿勢は譲ることのできない決意です。“いのちの尊厳のために”は、抽象的なスローガンではなく、コミ福で学びあう学生・院生、卒業生、教職員の行動の羅針盤でなくてはならないと考えています。

つぎに社会福祉の歴史からみると、戦争の後始末＝戦後の応急対策を担ってきたのが戦後社会福祉の実際でした。また戦争への道を歩むときには、福祉分野の財政は確実に削減されることとなります。戦争政策と福祉は両立しないことは、歴史が証明しているところです。いまの日本は社会保障・社会福祉の充実に舵を切るのか、戦争抑止力政策の推進のために兵器購入などの方向にさらに進むのか、注目し続けたいものです。

3つめにそれぞれの家族史を考える中で、あらためて時代と個人の間を捉え直してみることもできるのではないのでしょうか。祖父母や家族の歴史をみると、時代に翻弄された体験を持った方も少なくないのではないのでしょうか。いまの時代だからこそ語っておこうと思われる年配・高齢の方々もおられることと思います。

父が残した手帳（ガス障害医療券）

3つめに関わって、私の家族史にふれて書きます。

私の父は、第二次大戦中、17歳のときに瀬戸内海の大久野島という毒ガス製造の島（この島の歴史と現実を描いた『地図から消された島』〔ドメス出版、1987年〕という本もあります）に徴用され、従事しました。そのせいで晩年は肺がん・肺気腫を患って亡くなりました。当時、その島で従事した多くの人が肺がん・肺気腫で亡くなっています。

父が亡くなる直前、病院で私に渡された手帳がありました。『ガス障害 医療券』というものでした。そのなかに「本券はガス障害者と認定された者に交付し、次の疾病に限り無料で診療が受けられます」と書かれています。「お前は福祉の専門家だが、戦後半世紀たっても死ぬまで苦しめられている、こういう障がい者がいることを忘れてはならないぞ！」と、遺言を聴いた思いになりました。戦争体制に組み込まれた人間は、戦争が終わっても苦しめ続けられる現実を父の姿を通して知りました。

戦争を起こせば、その後何十年も苦しむ人々が残されることになります。沖縄戦における戦争トラウマは、半世紀以上たって現実があらわになってきました。戦争孤児たちの記憶と体験、傷痍軍人たちの戦後史…ベトナム戦争においては枯葉剤による人体・胎児被害、劣化ウラン弾による健康被害と後遺症、「湾岸戦争症候群」と呼ばれる戦地で恐怖の体験をした米軍兵士のトラウマ・精神疾患や自死など、戦争のあとにはまた戦争体験を背負い続ける苦しみが残されるのです。

「戦争は起こるはずない」というあやふやな確信について

歴史を具体的にみますと、1894年～2015年の121年間で、日本は6回の戦争にかかわっています。20年間に1回は他国との戦争をしてきたことになります。

1894年～1895年－日清戦争、1904年～1905年－日露戦争、1914年～1918年－第一次世界大戦、1931年～1933年－いわゆる“満州事変”（ここからが十五年戦争）、1937年～1945年－日中戦争（いわゆる“支那事変”）、1941年～1945年－太平洋戦争という歴史があります。

戦争に向かう国では、国家予算に占める「直接軍事費」の割合は、歴大に膨れ上がっていきます。大蔵省昭和財政史編集室編『昭和財政史 第四卷 臨時軍事費』（東洋経済新報社、1955年）によれば、国家予算に占める軍事費の割合は、日清戦争時で69.2%、日露戦争の時期には82.3%、太平洋戦争の末期には85.6%を占めるまでになっていました。使途の8割以上を占めたのは兵器を中心にした「物件費」でした。戦争は儲ける企業があるということです。そうした実際をみても、福祉と戦争は両立することはありませんし、スポーツも軍事教練化させられてきた歴史があります。

戦後70年間は戦争がありませんでしたが、戦前だけをみれば、51年間で6回の戦

争、10年に1回は戦争をしていたこととなります。戦争をしていた期間はあしかけ25年にわたることとなります。まさに20世紀も戦争の世紀でした。戦争の世紀をストップさせてきたのが憲法第9条であり、戦争を繰り返させてはならないという国民の声であったのです。いまこの時代のなかでどう生きるのかが一人ひとりに問われています。

今日の政治の分岐点

今の大きな政治の分岐点は、国家の安泰と「抑止力」があつてこそ国民の幸せは守られると考えるのか、一人ひとりの幸せが束になって国の本当の幸せの姿があるかと考えるのかです。

平和は力づくでは実現できないことは、イラク戦争やアフガニスタンの現実をみるだけでもわかります。わが国の第二次大戦後の歴史をみても、戦災孤児・浮浪児のための収容施設である児童養護施設、戦争で夫を亡くした寡婦と子どものための母子寮（現在の母子生活支援施設）、戦争で重傷を負った傷痍軍人のための身体障害者施設などによって、戦争犠牲者のためのケアと救済の制度として福祉は再出発をすることになりました。

私は「沖縄戦と孤児院」の研究を続けていますが、聞き取り調査のなかで、「孤児院での記憶はコンクリートで固めて、沖縄の海に捨てたい！」と、吐き捨てるように言われた方の言葉を忘れられません。戦争に向かう時代には、最も弱き人々がまずは切り捨てられてきました。障がい者、貧農、沖縄の地など、こうした戦争と福祉の負の歴史を再び繰り返すことがあってはならないと決意しています。

人間としてのまっとうな怒りを持ち続け、それぞれの持ち場でできることをやっていく勇気を持って行動し、この時代の希望と未来を創りだしていきましょう。